

ご講演を拝聴して

演題: 「学び直そう、日本の英語」

講師: 佐藤 良明 先生(元東京大学教授)

日時: 2011年9月10日(土)午後3時より

会場: 本学星が丘キャンパス

講師紹介: 今井 加壽 氏

佐藤先生によれば、ご自分はテロリストなのだそうだ。一億人の安定した生活を崩してやろうと、これまで様々な所で様々なことを仕掛けて来られた。でも、全部ポシャっているというのが自分の人生なのだと言いつつも謙遜にもサラッと述べられた。

そんな佐藤良明先生にとっての、「英語教育」との最初の出会いは、東大駒場(以前、そこでは1・2年生のみを教育する教養部であった)でのことだった。まだ頭の柔らかい入学して間もない1・2年生を掻き回したら、反応が面白いかも！それは、「アカデミックで話をまとめるのは嫌だ(先生は元々アカデミックなものが余り好きではなかったとのこと)」と思われる一方で、「アカデミックではないことに自分が果たして耐え得るかの実験」であり、そして、結果的に、そのことはご自身にとっての「学習の場」ともなったそうだ。

最初に紹介されたのは、先生がパートナーと称される「柴田君」こと、柴田元幸先生と2人だけで作られた2番目のユニバース(ご著書である *The Universe of English*) のオリジナル・ビデオだった。動画を使うより、概念に対する「静止画」を使った方が効果的な場合があるというのが、佐藤先生の主張される

所だ。それは、後に手掛けられる「リトル・チャロ」の教材の中にも生かされることになる。

佐藤先生が赴任される以前、東大駒場では、50人～80人の学生たちを相手に、英語教員たちが好きなことをやっていた時代があった。そこへ、大学院重点化が始まり、コマ数を増やさずに授業を効率的に行う方法を考えなくてはならないような事態が起こった。ところが、東大生の興味を引くような内容があるものを、簡単な英語でストンと落とせるような教材を作っていくことを目指してみたら、これが意外に面白かったそうだ。

そこで、話はテキスト(*The Universe of English*)の「注」の話へと進む。一見すると厄介そうに見えるテキストも、「注」を介すことにより、整理された易しいものになっていく。できるだけ瞬間的に、less verbally にテキストが理解できるような「注」を目指されたという。駒場での、そんな10年間は、先生にとって大変充実したものとなった。

佐藤先生は「言葉は神秘的なもの」と考えられる。基本的には同じはずなのに、文法が違っている、生き方が違っている、けど、通じ合える。

「言葉」を提示する際には、「コンテキスト」を明確にしていくこと、「概要」を明確にして

いくことの重要性をも説かれた。

また、無意味とも言える「大学入試英語」に代表される、抑圧的なシステムに対する「怒り」が、ご自身の中にはずっと存在していたそうだ。ただ、このような心の動きが、東大駒場での大英語改革に一役買っている(簡単な英語で表現しようとした点で)のかもしれない。

先生は、「言葉」という直線的な形で、人間が物に対してのテクノロジー的な行為は表現できたとしても、人間と人間との間で起こる、「愛」・「信頼」といったものは表現し得ないと考えられる。同じように、「教育」も一方通行的なものではあり得ず、常にサイクルを描くものだと言われる。「教育」とは、「刺激」と「反応」の相互作用の在りようを表し(刺激反応強化)、学生の「反応」が教師の次の行動を「強化」していく(べき)ものだと言われた。

これこそ、先生が「教育という空間」の中に何を持ち込むことが大切なのかということを中心に考えて来られ、これからも考えて行きた

いと述べられる所以なのかもしれない。

駒場時代以降、先生はご自身に合った形で教材を作られる機会にも恵まれた。そこから生まれたのが、NHK テレビで放映された「ジュークボックス英会話」と「リトル・チャロ」だった。

元々、ロックがお好きな先生は、「ジュークボックス英会話」の中では、体で表現するためにはどのようなビートに英語を乗せたら良いかといったことを考えるのが一番、楽しかったと熱く語られた。

「リトル・チャロ」では、物語の力によって、役者さんがどんどん盛り上がり面白がってやってくれたことが一番良かったと、振り返られる。どんなことでも、「楽しんでしまおう」というのが、佐藤良明先生なのだ。

あと10年でも15年でも、「日本中をオチョくするようなイタズラがしたい」と、茶目っ気たっぷりに話される。地方大学の小さな学会の会員たちに、大いに刺激を与えてくださった貴重な90分であった。

(文責:堀内ちとせ)